

2016年八月から2017年六月末までメキシコのチャピンゴ自治大学に留学をしていた。

留学の理由としてはメキシコの文化や食など日本と違った点をこの目でみてみたいということが一番であった。また、英語以外の言語も身につけられたら自分の将来に向けての強みになるなど感じていたためでもあった。私の留学していたチャピンゴ自治大学はメキシコシティー空港から車で約40分ほどのテスココという町にあった。学校の敷地はとても広く、畑もたくさんあり、農業高校、大学としてはかなり整った環境であった。そういった情報もあまり知らないままほぼ無知の状態で行ってしまった私には、着いてからが毎日衝撃で驚くことばかりだった。

八月の九日に到着し、その日からAUTOという学生寮での生活が始まった。小さい部屋に二段ベッド、勉強机しかない部屋だった。トイレとシャワーは各階共同で初めは慣れるまで大変だった。初めてシャワーを浴びるときはお湯が出ず、それを他のコロンビアからの留学生に説明しようとした。英語が全く通じず、身振り手振りで必死に伝えた。高校時にアメリカ留学を経験し、英語が話せればどの国でだって生活できるよねという私の思い込みと自信は一気に壊され、このままだとここでは生活できないと危機感を感じるようになったと共に何でもっと来る前にスペイン語を勉強してこなかったのだろうと後悔もした。そこから一週間は手続きなどを他の生徒やインテルカンピオの方に手伝っていただき、クラスに入るまでの準備を行った。もうチャピンゴの学生たちは新学期が始まって約2週間経っていたところだった。一緒にメキシコに来た川端さんはfitotecnia(農学部)、私はDICEA(経営学部)に入ることが決まっていたため、この準備期間が終わるとほとんどお互い違う生活が始まった。どんな時も新しいものを1から始めること、新しい出会いというのは緊張するもので、初めてのクラスの日もそうだった。そもそもよく授業のシステムがわかっていたなかったので、もともと来る前にマイさんにアドバイスをもらって農大で選んでいた三つの授業の中で好きな時間を選んだら、402のクラスの授業が一つ、501の授業が2つ、各授業が週に三回ずつあるというスケジュールとなった。チャピンゴには高校もある為、高校生が3年間で大学一年生の数え方としては4年生というカウントになる。どのクラスも私がほとんど話せないというのにとっても優しく話しかけてくれ、毎回でる宿題もかなり手伝ってもらった。特に501のクラスの授業は2つとっていたので個人的にとっても居心地がよかった。英語の話せる子が数人いて、初めの頃はずっと通訳をしてもらっていた。少しずつ耳もスペイン語に慣れてきたがやはりまだあいさつ程度がやっとだった。宿題もたまってよくわからず悔しくてストレスも溜まっていた中、映画やパーティーに誘ってくれたのもこのクラスのメンバーだった。そして、ある日、「学部の新学期パーティーのようなものがあるんだけどミスコンの企画にクラス代表として出てみない？」と言われ、意味もよくわからないままでることになった。これに参加したことがみんなとより仲良くなるきっかけ

けとなった。放課後にみんなでダンスを練習したり、歌を練習したり。みんなが手伝ってくれた。コミュニケーションが取れる特定の場所ができたことで私のスペイン語もどんどん成長していった。今まで机に向かってスペイン語を勉強して全く頭に入ってこなかったのが、話すことによって短期間で急速に自分が吸収していることに気付いた。語学だけではなく、日本人との行動の仕方の違い、流行りのものなど関わらなければわからなかったことばかりだった。これは、私個人的に留学生という立場での友達の作り方に対して感じたことなのだが、不特定多数に友達や知り合いを作るよりも、まずは少人数の特定の友達を作るというのも大事だと思う。なぜなら、初め、慣れていないうちにあっちやこっちに知り合いを作ると、困ったときにはこの人という相手がわかりにくくなり、あまりお互い知らないから聞くのを遠慮してしまったりする。特定の何人かの友達がいることで初めはその人たちだけでもその友達の友達という感じで信頼できる人の中でのコミュニティーが広がっていく。実際自分もこの501のクラスのメンバーと友達になってから、その友達の友達を紹介され、自分のコミュニティーがどんどん広がっていった。人それぞれやり方、考え方は違うと思うが、私はこの方法で一年間うまく楽しくすごせたと思っている。

メキシコはとても広い国なので地域によって全く文化が異なっており、特に興味深いものだった。

まず、メキシコはお祭りごとや行事が多く、家族との関係をととても大事にする国だった。学科の建物には独立記念日、死者の日、クリスマスなど、行事の度に違った飾りつけがされていた。どれも色使いが華やかでこれもひとつの魅力であると思う。キリスト教の人がほとんどなので、その飾りつけや色使い一つ一つにもまた意味があってそこもおもしろい。9月には独立記念日があり私は友達の家にいきプチホームステイ的なことをさせてもらった。伝統料理の **pozole** を食べ、夜は町の集まりに行き夜中までステージのパフォーマンスをみて楽しんだ。日にちが変わるころに大きな鐘がなりみんなで独立記念日を祝う様子はなんとなく日本の大晦日に似ている気がした。

また、各州によって伝統的な文化が異なっているのもメキシコの面白いところだと思う。10月にチャピング大学では約二週間、**feria** という文化祭のようなものが行われていた。

各州の人たちが物産をもってきていてたくさんのお店がでていた。歩いてみているだけでメキシコを全部旅行したように思えるくらい本当に各州で違っていた。

そして、11月には死者の日があった。これは日本のお盆のようなものだがこれもまたかなり日本とは異なっており、シンプルに言ってしまうと、かなりカラフルで派手なお盆といった感じだった。飾りつけにはそれぞれ意味があり、オレンジの花は光、周りに飾る紙は風を意味していた。私の学科（DICEA）では各クラスが死者の日の祭壇をつくっており、学校内がかなり華やかだった。このように行事一つ一つをこの目で見て感じることも留学の魅力であると思う。

また、メキシコの人たちは食べるのが大好きである。基本主食はトルティーヤで、トウモ

ロコシは私たちが好んで食べる黄色のものよりは白いトウモロコシや、青や黒のトウモロコシの方がよく食べられている。トルティーヤといえばじゃあタコスしか食べないの？と思うかもしれないが、タコス以外にもメキシコにはおいしい料理が沢山ある。学食の食事は毎日違うメニューが出ているのだがそれも各州の伝統料理がでたりして、学食を食べているだけでも学ぶことが多かった。定番のタコスは日本で売っているタコスとは全くと言っていいほど異なるものだった。メキシコの本場のタコスは思っていたよりもシンプルで、小さめのトウモロコシでできたトルティーヤにお肉が乗っていてその上にお好みで、小さく刻まれた玉ねぎ、パクチーを乗せ、レモンをかけ、辛いのが平気ならそこに赤いサルサか緑のサルサをかけて食べるという料理だった。最初からがっつり味がついているというよりも、サルサとレモン、肉とトウモロコシの素材の味をそのまま味わえるという感じだった。もっとがっつりギトギトした料理が多いというイメージだったが、そんなことはほとんどなく食生活にはそんなに困ることはなかった。

私は 8 月から留学を始めたのでチャビンゴの新学期始まりと同じタイミングで前期、後期という形で周りの生徒たちと同じように二学期分を過ごすことができた。後期からは、農大の方からもサポートをしていただき、colonia de profesores という先生方用のアパートに住み始め、キッチン付きで自分専用の部屋ができ、AUTO も好きだったがプライベートの時間ができ、気持ち的に楽になった。また後期の授業は前期の時と比べるとかなり理解できるようになり、先生に意見を聞かれたときに答えられるようになった。急にだされた宿題も一人でできるようになり、スペイン語が自分の中で他の国の違う言葉ではなく、自分が使えるもう一つの言語として変わってきたように思えた。日本人ならではの考え方や日本人だからこそ伝えられるようなことも授業を通して話す機会も増えた。例えば、先日は日本の輸出入のプレゼンテーションを日本語とスペイン語の両方で行った。他のメンバーはフランス語やドイツ語でやったりと、インターナショナルな授業でとても面白かった。しかし、とある授業で日本について聞かれたとき、日本の歴史や他国との関係について聞かれ、自分の知識不足で何も答えられなかった。今までずっと英語など他言語を学ぶことが好きで自分はそれをなによりも頑張ってきたが、日本人として知っておくべきことをあまり知らないままで過ごしてきてしまった。自分は自分の周りにいるメキシコ人にとっては日本人代表なわけで、日本人であるのにも関わらず自国のことを知らないなんてとても恥ずかしいと感じた。しかし、こういったことも留学をしていなければ気づけなかったことだ。

チャビンゴ大学に来ている留学生はほとんどが半年間なので一年間いる私はかなり珍しく、学内を歩いていると手をふってくれたりあいさつをしてくれたりする人が前期よりもかなり増えた。ただ留学に来ている日本人学生というよりもチャビンゴの大学生の一人として過ごしているように感じられるようになった。

個人的に留学の中でかなり充実した経験が得られたのは、割と頻繁にあるクラス研修の旅行 (viaje) だった。例えば、12 月上旬から中旬まで約二週間、私は 501 クラスのみんな

と一緒にバス旅行に行った。カンクンに向けていろんな州に泊まりながらの旅行だった。私のいる学科は *comercio internacional* といって国際貿易などを勉強している学科だったので、税関を見学したりそういった仕事に関わっている人の話を聞いたりもした。チアパス、ベラクルース、タバスコ、カンクンなどたくさんの州を見てまわって各州の雰囲気や気候の違いを感じることができた。また、六月には二週間ほどやはり501のクラスのメンバーとチワワ州に向けてメキシコ北部の州をほとんどまわる二週間のバス旅行をした。12月にいった南部とは全く異なった環境で土から空気、すべてが違っていた。同じ国でもこんなにも違うのかと驚いた。また、毎日いろいろな施設の見学がスケジュールに組み込まれていて、メキシコでは有名な LALA という牛乳工場や、豚を精肉にする工場など、将来輸出入に関わる仕事をしたい生徒たちのために、そういった現場の実態を学んでおかなければならないだろうという先生の思いから組まれていたスケジュールだった。これは、普段こういった現場を見る機会などない私にとっても大変有意義な旅行となった。また、後期の農大からの留学生のベラクルースにむけた旅行にも参加させていただいた。コーヒー豆は畑から収穫、加工まで、バニラを生産している女性団体や苗木を育てている畑なども見学させていただいた。自分のスペイン語のレベルが自ら質問したりコミュニケーションをとったりできるくらいまで成長していたため、生産者さんたちの話を聞くのがとても興味深かった。バニラの生産と共にバニラを使ったアクセサリー、石鹸などをつくっている女性団体は7名のメンバーで経営をしていた。しかし、お話を聞くと「中には小学校までしか卒業をしていないメンバーもいるから知識と自信がなく、自分たちの製品が海外に売られているということは知っているのだが、自分たちはあまり関わっておらず、これが自分たちでも管理ができたらもっといいのに」と言っていた。また、苗を育てている畑で出会ったおじいさんとは個人的に話をしていたのだが、彼も「今のメキシコの問題はものはたくさんあるのにそれらを売るサイクルがなくうまくビジネスが成り立っていないことだ。」といていた。これらは私もメキシコで暮らしていて感じていたことだった。メキシコには野菜や果物など日本よりも新鮮でおいしいものが沢山ある。しかし、すべてがとても安く、無駄になってしまっているものも多いのだろうなども感じていた。またバニラの団体の話を聞いた時、彼女たちのお客は通りすがりの人やイベントに来ている人達というのを聞き、こんなに素敵な製品があるのだから、もっとうまくビジネスをすればきっともっと発展していくのだろうと感じた。なんだかもどかしい気持ちにさせられたし、将来自分がこういった人たちの手助けができればいいのにも感じた。このように、普段はチャピngoでの座学が多かったのでこういった現場でのお話が聞けることは自分にとってかなり刺激になった。

留学期間は自分自身と向き合う時間がとても多かったような気がする。日本の外に出た時点で自分は外国人であるという状況に慣れるまで時間がかかった。そんなこと当たり前だし、わかっていたつもりだったが、「わ！アジア人だ！！」という感じでみられる周りからの目線が苦手だった。日本人ではなくアジア人としたくくりとして見られてしまうのも

少し悔しかった。でも会話してみると大抵「え!!!日本人なの!?テクノロジーが進んでるよね!!!」など興味をもって話をしてくれるのだった。自分は外国人であることを恥じていた。でも、それって特別なことだしもっと日本人であることに誇りをもって日本がどういう国なのか知らない人たちにもっと日本の事を知ってもらえるようにがんばろうかなと思うようになった。また、日本人が日本に来ている外国人に話しかけられても距離を置いて話してるシチュエーションよく見かけたことがあるのを思い出した。日本人だっておなじようなことを海外の人たちにしてしまいがちなら、自分はこのような経験を積んだ以上、そういう反応はしないようにしようとも思った。そんなことを考えていた矢先に、やはり出会いというのは不思議なもので、ある日家の外に出て学校に向かおうとしていたらお向かいに住んでいる見たことのなかった男性が声をかけてくれた。始めはどこから来たのかなど聞かれたことに答えていたのだが、私が日本人と分かった瞬間、その男性の顔がパーっと明るみ、「よかったら、僕の娘に日本語を教えてやってくれないかな?」と言われた。本当に言っているのか半信半疑だったが、「いいですよ。」といい、連絡先を交換した。後日連絡がきて、友達に「この人近所に住んでいるんだけど知ってる?」と聞くと、「あ!その人、前のチャビンゴの理事長だよ!!!」と言われた。何となく初めて会った時にそんなことを言っていたような気がしていたが確かではなかったのだが、その人は本当にチャビンゴの前の理事長をやっていた方だった。娘さんは12歳くらいの女の子で、アニメなどをきっかけに日本に興味をもったらしい。私の週一回の日本語レッスンは話をもらった二週間後に始まった。とにかく、教え込むというよりは日本語に楽しく触れてほしいという思いがあったので、すこしずつひらがなとカタカナを教え始めた。彼女は、「いつか日本にいきたいんだ」と話してくれた。「日本で2020年にオリンピックがあるんだよ!きっと盛り上がるから来たらいいんじゃない?」というキラキラした目で「じゃあそれまでに日本語をもっと勉強していきたい!」と言っていた。このように、日本に興味をもってくれている人たちは沢山いる。何となく以前よりも日本人でいることを誇りに思えたと共に、自分もそういった人たちとさらに関りを増やして手助けができればとも思った。

三年生の一番日本での学生生活が楽しい時期に留学に行くのはもったいないなと迷ったこともあった。しかし、この選択が正しかったと強く感じている。自分が日本でいくら時間をかけても感じる事がなかった思い、知識が一月一月どんどん自分に向けてやってきて、それを自ら吸収して。その経験ができたことがこの留学の一番の収穫であると思う。また、留学に行かなければ出会えなかった沢山の人たちに会えることができた。何よりも、自分の家族、農大の先生方や友達、国際協力センターの方々、受け入れてくださったチャビンゴ自治大学には本当に感謝をしなければならぬ。本当にありがとうございました。

コメントの追加 [鈴木綾華1]: